第4章　オープン・スタジオにおける番組参与者の志向性
－参与フレーム・マイク・リスナー－

ＦＭやまのは班

1　問題

７月６日のＦＭやまのは[1]のオープン・スタジオ[2]での様子が撮影されたデータを分析するにあたり、私がはじめに注目したのは、番組の終了場面であった。＜断片１＞は、午後２時40分ごろから放送された番組「フォーティーン・セイリング」の終了直前の場面で、３節で分析する＜断片４＞の音声だけを書き出したものである。

＜断片１＞：データＹ：3:34′ 25”~3:34′ 35”[3]

01 Ｍ：=(これまで)お届けしてまいりました、今日のお相手はわたし
　　まつやまだこう(い)ちと::
02 (1.0)
03 Ｓ：サミュエルと=
04 Ｙ：=ディージェーやすと
05 Ｈ：ほりせいだいで
06 (1.0)
07 Ｍ：そして
08 (1.6)
09 Ｃ：つばめのチャンチャンでした:=
10 Ｍ：=このあと、チャンチャンスペシャルお届けhしてまいりま::す

Ｍ、Ｓ、Ｙ、Ｈ、Ｃは、いずれもＦＭやまのはのメンバーで、かつこの番組の参与者である。番組を「届け」てきたかの女／彼らは順番に名乗り、この後に番組「チャンチャンスペシャル」が放送されることを公表している。

私には、参与者の名乗りが、特にＨとＣとの間がスムーズになされていないことが、たとえＦＭやまのはが営利を目的とした放送でなく、参与者がプロではないとしても、不思議であった。「つうじょう我々は、相手の外的な振る舞いに、内的な心理状態を対応させるなどといったことをしなくとも、端的に、お互いの行為を理解・記述・報告することができる」[森田，1997：103] から、Ｃは、Ｈの次に発言するのを期待されていることを理解しているはずである。

ところで、＜断片１＞の９行目のＣの発言は、ＣがＣの左隣に位置するＳの前に置かれているマイクを使用してなされていた。ＦＭやまのはでは、マイクが置かれたテーブルを囲むように参与者が椅子に座っているのだが、おもしろいことに、この時点においてＣの前にはマイクは置かれていなかったのである。

今、私は「○のマイク」ではなく、「○の前に置かれているマイク」と記述した。後者のほうがより場面を客観的に描いていると思うからである。対して前者は、「○の前のマイク」は「○のものである／○が所有している」というニュアンスがある。しかし、マイクに正面から向かう、つまりマイクに正対する参与者を観察するとき、私はしばしば「○のマイク」と記述したくなるし、なぜ参与者が「マイクを所有している／していない」ように見えるのか、ということは少なくとも研究の糸口に成り得ると思う。

私は、はじめにオープン・スタジオにおけるラジオ番組らしさについて記述する。その後に「参与者が前に置いてあるマイクを所有している／所有していない」見えることについての説明を試みる。それは、視線やふるまいを含んだトランスクリプトであるいくつかの断片と同じく視線やふるまいを含んだ静止画像データなどであるいくつかの図によってなされる。

2　番組参与者の志向

ラジオ・スタジオの参与者は、少なくとも番組を放送している間は、ラジオ番組らしくふるまっていると考えられる。しかし、そのことは撮影されたデータのなかで示されなければならない。私は＜断片２＞、＜断片３＞を分析することでそのことを示そう。

＜断片２＞は、＜断片１＞と同じく、番組「フォーティーン・セイリング」の１場面であり、「七夕」を話題とする会話がなされている。

Ｍが七夕を話題とし、ＳがＭに「(七夕の日に)なにかやるん（なにかするの）？」とＭが個人的に七夕の日にどのようなことをするのか尋ねたところ、Ｍが答えに窮してしまったので、続けてＳはＣに「七夕ってなにするの」と七夕のことについて尋ねている。図１はそのときの静止画像データである。

＜断片２＞：データＹ：3:32′ 38”~3:32′ 52”：Ｙ、Ｈのトランスクリプトは省略
中中中：中空、下下下：下

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中....SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
Ｍ：あしたたな//ばたなんですよ::　　　=んうん、まっつぁんはねh、うーんとね、何

MM.中中中中中中中中中中中中中中..MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
Ｓ：　　　　　//まっつぁんなにかやるん=

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中.....................MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
Ｃ：

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
M：しようかなh、あした仕事なのよhほhほhほhほhほhほh　　　　　　　//へ

MMMMMMMMMM中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中MMMMMMMMMMMMMMMM....CCCCCC
S：　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　俺も仕事だけど//たなばたっ

MMMMMMMMMMMMM中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中....MMMMMMMMMMMMMMSSSSSSSS
C：

↓図1
SSSSSSSSSSSSSCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC..HH
M：　　　　　　たなばたは：　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ねっ、…

【マイクから離れる】
CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC下下下下下下下下下下下下下下下CCCC下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下
S：てなにすん(の)

【身を乗り出しSの前にあるマイクに近づく】　　　　　　　　　【マイクから離れる】
SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS中中中
C：　　　　　　　　　　　ささに：、お願いごととかじゃないんですか

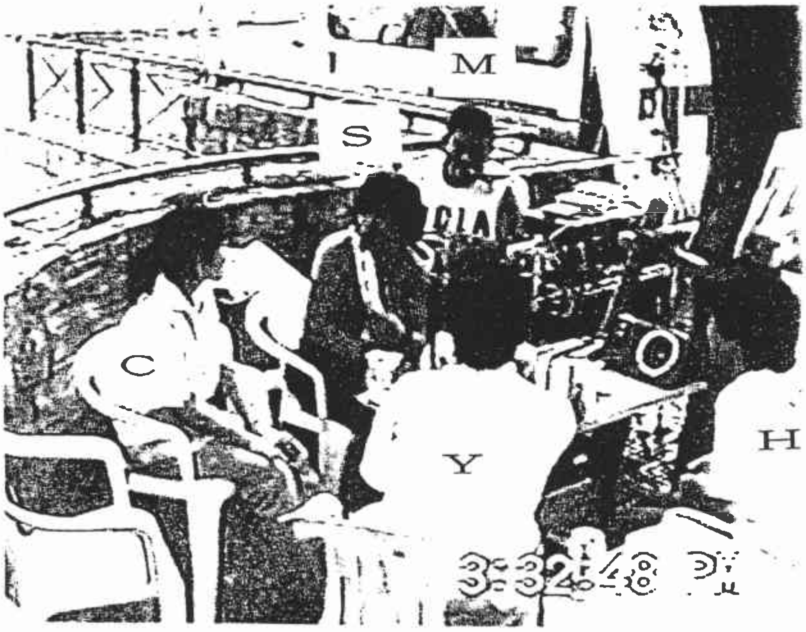

図1　SのCとマイクへの志向　カメラI（3:32′48”）

ここでは、七夕を話題としたMに、Sが、Mは個人的に七夕の日にどのようなことをするのかと尋ねたところ、Mが答えに詰まったので、SはCを振り返って見て「七夕ってなにするの」と尋ねている。図1はそのときの静止画像データである。そしてCはSの質問に答えて発言している。

ここで注目するべきことは、SがCを見て話している、そのしかたである。このSのふるまいには異なる二つの志向が含まれている。ひとつはCに対する志向で、もうひとつはマイクに対する志向である。Cに対する志向については、SがCに視線を移しているのが図1から明らかであるので、問題ないであろう。しかし、Sのマイクに対する志向には若干の説明を必要とするであろう。

そこで図2を見て頂きたい。Sが、①のマイクに正対している状態から、Cを志向つまりCを見ようとすると、②で示されるように口もとがマイクから離れてしまう。ゆえに、Sが、2つの異なる志向を両立させるためには、③のように顔をマイクに向かって左側に移動させる必要がある。

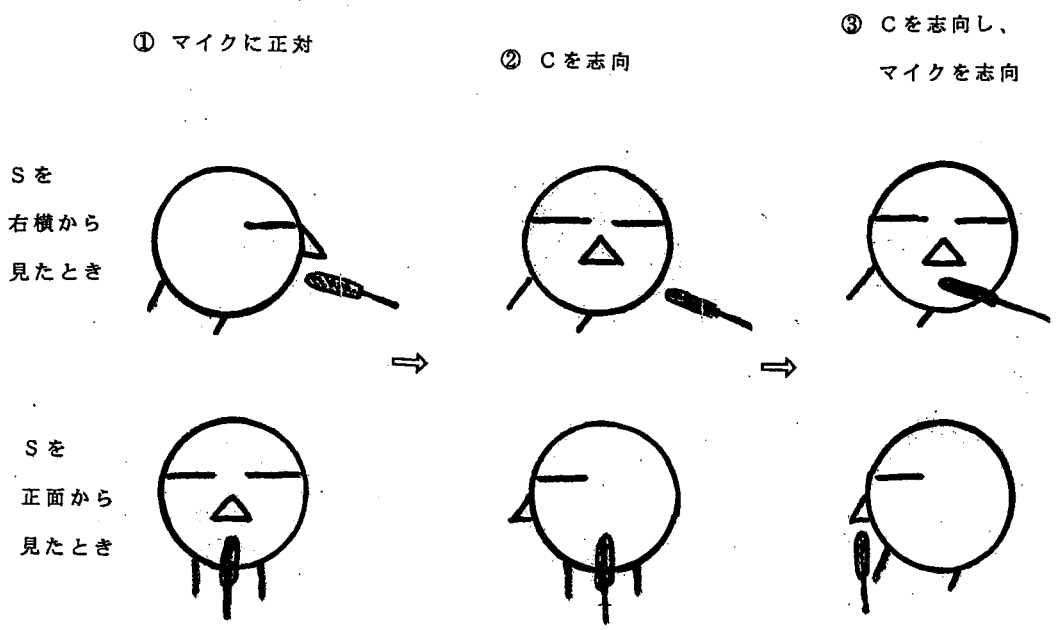

図2　SのCとマイクの志向の図式化

参与者は、番組のなかで放送するべき会話をするときには、いつでも会話できる体勢をとっている。それはマイクを志向していることを示しているが、それだけでは明確さに欠ける。しかし<断片2>の分析は、参与者がマイクを志向している証拠となる。

マイクを志向するということは、どうじにマイクを通して放送される会話を聴いているリスナーを志向しているということである。その証拠として<断片3>についての分析を次に示す。

<断片３>：データＹ：3:26′00”~3:26′06”
BBB：スタジオの前を通過する人、JJJ：スタジオの前の川を通過するジェット・スキー
???：不明、ｱｱｱ：アイス、ﾏﾏﾏ：マイク

↓図３

BBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBBJJJJJJJJ
Ｍ：ねぇ、え:暑い中ですけど、がんばって お買物:してください、あ、(3.0)

【アイスをあおって食べる】

MMMMMMMMMMMMMMMMM..ｱｱｱｱ????????????????????????????????YYYYYYYYYYY
Ｓ：

【アイスをあおって食べる】

ﾏﾏﾏﾏﾏﾏﾏﾏﾏｱｱｱｱｱｱｱｱｱｱｱｱｱｱ?????????????????????????????????下下下下下下下下下
Ｙ：

【アイスを食べる】

ｱｱｱｱｱｱ...CCCCCCCCCCCCCCCCMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM下下下下下下JJJ
Ｈ：

下下下???
Ｃ：

図３　Ｍの歩行者への志向および発言　カメラＩ（3:26′03”）

＜断片３＞においては、場面全体にわたりスタジオのそばを通過するジェット・スキーの走行音が響き、またスタジオのそばを、買物をしているとＭが判断した２人の女性が歩いている。視線の向きと発言の内容から、Ｍはその女性に向けて発言している。図１はそのときの静止画像データである。

Ｍは「買物をしている」２人の女性に話しかけているのであって、他の参与者、つまりＳ、Ｙ、Ｈ、Ｃに話しかけているのではないということは、他の参与者がＭに視線を送るなどの反応をしていないし、Ｍもそのことを不思議がっていない、ということからも示される。Ｈだけは反応しているようなふるまいを見せているが、それはＨが歩道に面した位置に座っており、歩道を歩く女性へのＭの視線を誤って受け取ってしまったからだと思われる。

Ｍの発言とふるまいは、オープン・スタジオにおける放送らしさ、つまり番組のライブ感の演出であり、そのことはまずＭがリスナーを志向していることを示している。また、他の参与者も反応しないことによってライブ感の演出に参与していることから、リスナーへの志向をもっていることが分かる。

３　参与フレームから見える参与者たちの志向

これまで、参与者がラジオ番組らしくふるまうそのしかたとして、参与者がリスナーを志向していることについて述べてきた。これからは、番組のなかの参与フレームに注目して参与者がリスナーを志向していることを示しながら、あわせて、私自身の疑問である「参与者が目の前のマイクを所有している／していない」ように見える部分についても、私なりの説明を試みる。

西阪によれば、「参与フレームは、参与者たちの参与のしかたであり、どうじに参与者たちが参与している場面設定における出来事を経験するための枠組」[西阪，1992：61]である。すなわち、参与者の位置や向き、体勢のありかたであり、その形式のなかで、場面場面における参与者のふるまいが有意味なものとして参与者自身や分析者に認識されていくのである。

＜断片４＞は、１節で少しふれたが、午後２時40分頃から放送された番組「フォーティーン・セイリング」の終了直前の場面である。また、図４、図５、図６は、それぞれ＜断片４＞に示した時点での静止画像データである。

＜断片４＞：データＹ：3:34′ 25”~3:34′ 36”

中中中：中空、下下下：下、アアア：アイス、マママ：マイク、nod：うなずき

ママSSSSSS

Ｍ：(これまで)お届けしておりました、今日のお相手はわたし松山田こう(い)ち

nod　　nodnod　　【椅子にもたれる】　　【顔を上げる】

H.....MMMM..YYYYYYYYYY下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下中中中中中

Ｓ：

↑図４　　【椅子にもたれ、アイス持ち上げる】

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSS中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中アアアアアア

Ｙ：

下下下下下下MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

Ｈ：

【椅子にふかく座っている】

（Ｃの手で顔が隠れていて分析不能）

Ｃ：

【Ｓに顔を向ける】

SSSSSSSSSSSSS..YYY..HHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHCC

Ｍ：と:::(1.0)

【顔をマイクに近づける】

中中中中中中中中中YYYYYY....HHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH....下下下下下下

Ｓ：　　サミュエルと=

【アイスを下ろし、顔をマイクに近づける】

アアアアSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSHHHHHHHHHHHHH

Ｙ：　　=ディージェーやすと

↑図５　↑図６　　【Ｈの前にあるマイクを手で持つ】

MMMMMSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSママママママママママママMMMMMM

Ｈ：　　堀せーだいで

SSSSSSSSSSSSYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYHHHHHHHHHHHHH

Ｃ：

【顔を傾けて発言】
CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC中中中中中中HHHHHHHHHH中中中中中中中中中中中中中中中
M：　　そして(1.6)　　　　　　　　=このあと、チャンチャンスペ
【マイクから離れ，椅子にもたれる】
下下下下下下下下下下下CCCCC（Cに隠れて分析不能）下下下下下下下下下下下YYYYYY下下下下下下下下下下
S：

SSSSSSSSSSSCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
Y：
【咳をする】
下下下下下MMMMMMCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCSSSSSSSSSSSMMMMMMMMMMMMMMM
H：(1.0)
nod　　【身を乗り出し顔をマイクに近づける】　　　　　【身を戻して椅子にふかく座る】
.....MMMMマママママママママママママママママママママママママママママママママ下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下
C：　　　　　　　燕のチャンチャンでした:=

中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中
M：シャル(仮名)お届けhしてまいりま::す

下下下下下下下下下下下下YYYY下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下
S：

MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
Y：

MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
H：

下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下下
C：

図４　ＳとＹはマイクに正対　カメラＩ（3:34′ 25”）

図５　ＳとＹはマイクから離れる　カメラＩ（3:34′ 28”）

図６　ＳとＹが再びマイクに正対　カメラＩ（3:34′29”）

図４、５、６を見ると、次のようなことが分かるだろう。参与者は、マイクが置かれているテーブルを取り囲むように座っている。マイクはＳ、Ｙ、Ｈの正面には置かれているが、Ｃの正面には置かれていない。参与者の座っている椅子とテーブルとの位置関係について言えば、Ｓ、Ｙ、Ｈの座る椅子に比べ、Ｃが座る椅子はテーブルから離れている。

＜断片４＞で何が起こっているのかについて細かく見ていこう。この場面の前に、ＭはＨ、Ｙ、Ｓにこの順番でコメントを求めている。そしてそれに続くＭの「これまでお届けしておりました、…」という発言の間にＳはＭを見て、続いてＹに視線を移しながら２回うなずいている。この後ＳとＹはマイクから離れ椅子に深くもたれ、さらにＹはアイスを食べようとしている。その後、Ｍが自分の名前を名乗るに至ると、Ｓ、Ｙは体を起こしマイクに近づき、それぞれ名乗っているが、Ｃは椅子にもたれたままで体を起こさない。Ｈはこの間一貫して、マイクに接近はしていないが椅子にもたれてもいない体勢を続けている。Ｈの発言の後、ＭはＣを見ており、ＣはＨからＭへとゆっくりと視線を移している。ＭはＨの視線を獲得したとき、「そして」とＣの発言を促し、Ｃは身を乗り出してＳのマイクに近づき発言している。そのあとＭは、番組「チャンチャンスペシャル」がこの後放送されることを発言して、番組を締めくくっている。

参与フレームの観点から＜断片４＞の様子を見てみる。ＳとＹは、まだ番組が終了していないにもかかわらず、マイクから離れ椅子に深くもたれたということ(図５)、いつでも発言できる体勢を崩したということであり、もうこの番組中では発言をする必要がないと判断したことが推測できる。しかしながら、その後に名乗るという発言をする必要が生じ

たとき、すばやく彼らは、いつでも発言できる体勢を作り出している(図6)。それに対してCは、この間椅子に深くもたれたままであり発言する気がないように見える。しかし、私は、発言する必要があるときに身を起こしてマイクに正対したSやYだけでなく、Cもまた、このふるまいをすることでリスナーを志向していたように思われるのである。

別の番組で、Cと似た立場の参与者を見ることができる。<断片5>は、午後3時45分ごろから放送された番組「チャンチャンスペシャル」の冒頭部分であり、図7は、<断片5>に示された時点での静止画像データである。

<断片5>:データY:3:45′ 21"~3:45′ 36"

KKK:缶ジュースとカップ, III:調整卓などの機器、中中中:中空、下下下:下

【マイクから離れている】
IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIICCCCCCCCCCCCCCCCCC
M:

↓図7

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC
S:というわけでね　なんか今日は、特番でチャンチャンチャンチャン

【椅子に深く座り、マイクから離れている】
SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
Y:

【椅子に深く座っている】
SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
H:

nod　nod
SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
C:　はい　チャンチャン

【右下のほうを見て缶ジュースを持ち上げる】
CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC下下中中中CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC
M:

【首をかしげる】
CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC
S:　なんだろう(1.4)

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC
Y:

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC
H:

nod　【首をかしげる】
SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
C:チャンチャン　チャンチャンチャンチャンどこいくの

【右手で持っている缶ジュースを左手で持っているコップに入れる】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKKK

M：ちゃh//ははは　　　　　　　　　　　　　=どんな番組やねん(2.0)

【Mのほうを見る】

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC下下下下下下下下下下CCCCCCCCCCCCCCCCC..MM.CCCCCCCCCCCC

S：　　　　　　　　//どこいっちゃうんだよ=　　　　　　　　　　天気もいいし

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCSSSSSSSSSSSS

Y：

CCCCCCCCCCCCCCCCCC....SSSSSSSSSSSSSSSSS下下下下下下MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMMM

H：

【笑いながら椅子にもたれる】　　　　　　　【マイクに向かう】

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS下下下下下下下下下下下下下下下下　（分析不能）　　　SSSSSSSSSSSS

C：　　//はhはhはh//はhはh

【コップのジュースを飲む】

中中中

M：

nod

CCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCCC

S：どこいこうかなっていう=　　　　　ねえ

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

Y：

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

H：

nod　nod

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

C：　　　　　　　　　　　=そうですね　　はい

図７　番組「チャンチャンスペシャル」 カメラＩ（3:45'23"）

＜断片５＞は、この番組の仮のタイトルである「チャンチャンスペシャル」に代わる適当なタイトルをＳとＣが話し合っている場面である。Ｃの提案した「チャンチャンチャンチャンどこいくの」に対して、Ｍが冗談半分で番組の内容がよく分からないと指摘したため、ＳとＣが説明を加えている。

椅子やマイクの配置については、前の番組「フォーティーン・セイリング」のときとあまり変わらない。しかし、参与者の位置や体勢は大きく異なっている。まず、ＨとＣの位置が入れ替わっている。つまり、Ｓと対面する位置にＣが座っている。ＳとＣは、互いに向き合い、視線を送り、会話をしている。それに対して、Ｍはマイクから離れ、もっぱら放送機器の操作に集中しており、Ｙ、Ｈは椅子に深くもたれ続けている。

私には、参与者が番組の参与フレームを成り立たせているそれぞれのふるまいを維持し続けることによって、全体としてリスナーへの志向が作りあげられているように思われてならない。＜断片４＞におけるＣと似た立場と思われる、＜断片５＞のＹは、椅子に深く座り続けることで、全体としてのリスナーへの志向の一部を担当していたのではないか。このＹは、Ｙの前にあるマイクを所有しているようには見えないが、むしろ私たちに「マイクを所有していない」と思わせるふるまいをし続けることで、全体としてのリスナーへの志向を作りあげていたのではないか。

4　おわりに

ラジオ放送の参与者は、番組のなかでさまざまなしかたでリスナーを志向している。そ

のやりかたのひとつにマイクへの志向がある。しかし、リスナーの志向は、参与者のそれぞれがべつべつになしているのではなく、全体としてなされているのではないか。また、「参与者が目の前にあるマイクを所有している／所有していない」ように見せる参与者のふるまいは、リスナーを志向することのひとつのやりかたではないか。

注

(1)徳島市のある公園で毎週土・日曜日に開局されている。新町川を守る会の下部団体でメンバーは皆ボランティアである。リーダーであるM氏によると、電波を飛ばすことが目的ではなく、ＦＭという手段を用いることで人が集まってくる、ということが目的であるそうだ。

(2)ＦＭやまのはは、公園にスタジオを作っているため、ふつうの放送局のように、内と外との仕切りが全くない。だから、参与者は自由に道行く人々に話しかけることができるし、外の情報をただちに番組に取り入れることができる。ただし、どうしても放送機材は限られた質と量になってしまう。

(3)ここで使われているトランスクリプトについては、第１部の記号一覧表を見よ。

参考文献

森田聡之(1997)「気にすること・無視することの分析可能性」,『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:99-122.

西阪　仰(1988)「行為出来事の相互行為的構成」,『社会学評論』,154:102-118.

――,(1992)「参与フレーム身体的自己組織化」,『社会学評論』,169:58-73.

――,(1997)「語る身体・見る身体」,『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:3-29.

岡田光弘(1996)「『制度』を研究するということ　－インタビューと１１９番通話の終了部の会話分析－」『現代社会理論研究』,6:165-180.

岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男(1997)「救急医療現場の社会的な組織化」,『語る身体・見る身体』,ハーベスト社:168-186.

Schegloff, Emanuel A.& Sacks, Harvey 1973 `Opening up Closings' Semiotica,8(4):289-327.＝1989「会話はどのように終了されるのか」北澤・西阪 訳『日常性の解剖学』pp.175-241.

山崎敬一・好井裕明(1984)「会話の順番取りシステム－エスノメソドロジーへの招待」,『言語』,第13巻,７月号:86-94.

山崎敬一・佐竹保宏・保阪幸正(1993)「相互行為場面におけるコミュニケーションと権力－<車いす使用者>のエスノメソドロジー的研究研究－」,『社会学評論』,173:30-46.